

Title	19世紀アメリカ南西部における綿花プランテーション経営：遠隔地管理についての一考察
Sub Title	Cotton plantation management in the antebellum American South : absentee ownership on the southwestern frontier
Author	柳生, 智子(Yagyu, tomoko)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.103, No.3 (2010. 10) ,p.471(85)- 499(113)
JaLC DOI	10.14991/001.20101001-0085
Abstract	<p>本稿は1830年代から50年代にかけて、アメリカ南西部において複数の大規模綿花プランテーションを遠隔地から経営していた事例から、南部経済を支えた綿花生産が南北戦争前に飛躍的な上昇を続けた要因について考察する。本稿は、プランテーションの効率性に関して、新品種の採用、技術改良に加えて、プランテーションにおける監督の徹底、奴隷管理方策、プランテーション間の分業体制などの要素に焦点を当てて分析する。</p> <p>This study examines the factors that caused the continued dramatic rise in cotton production before the American Civil War, which supported the Southern economy from the 1830s to the 1850s, from a case study of several large-scale absentee cotton plantations in the southwestern United States.</p> <p>Moreover, it will focus on and analyze factors such as the methods of plantation supervision, slave management measures, organization of labor division among plantations, the adoption of new plant varieties and technological improvements, all of which relate to the efficiency of plantation production.</p>
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20101001-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

19 世紀アメリカ南西部における綿花プランテーション経営—遠隔地管理についての一考察—

Cotton Plantation Management in the Antebellum American South: Absentee Ownership on the Southwestern Frontier

柳生 智子(Tomoko Yagyu)

本稿は 1830 年代から 50 年代にかけて、アメリカ南西部において複数の大規模綿花プランテーションを遠隔地から経営していた事例から、南部経済を支えた綿花生産が南北戦争前に飛躍的な上昇を続けた要因について考察する。本稿は、プランテーションの効率性に関して、新品種の採用、技術改良に加えて、プランテーションにおける監督の徹底、奴隷管理方策、プランテーション間の分業体制などの要素に焦点を当てて分析する。

Abstract

This study examines the factors that caused the continued dramatic rise in cotton production before the American Civil War, which supported the Southern economy from the 1830s to the 1850s, from a case study of several large-scale absentee cotton plantations in the southwestern United States. Moreover, it will focus on and analyze factors such as the methods of plantation supervision, slave management measures, organization of labor division among plantations, the adoption of new plant varieties and technological improvements, all of which relate to the efficiency of plantation production.

19 世紀アメリカ南西部における 綿花プランテーション経営

——遠隔地管理についての一考察——

柳 生 智 子

（初稿受付 2010 年 9 月 2 日、
査読を経て掲載決定 2010 年 10 月 29 日）

要 旨

本稿は 1830 年代から 50 年代にかけて、アメリカ南西部において複数の大規模綿花プランテーションを遠隔地から経営していた事例から、南部経済を支えた綿花生産が南北戦争前に飛躍的な上昇を続けた要因について考察する。本稿は、プランテーションの効率性に関して、新品種の採用、技術改良に加えて、プランテーションにおける監督の徹底、奴隷管理方策、プランテーション間の分業体制などの要素に焦点を当てて分析する。

キーワード

プランテーション経営、綿花貿易、奴隷制度、アメリカ南部

はじめに

1836 年、アメリカの財務長官リバイ・ウッドバリー（Levi Woodbury）は、世界の綿花市場と消費動向について連邦議会で報告した。当時、綿花はアメリカの最重要輸出作物となっていたが、このウッドバリーの報告は綿花輸出における競争国であったブラジル、西インド諸島⁽¹⁾、エジプト、インド、メキシコなどの生産状況に関するものであった。1834 年にアメリカは約 200 万エーカーの綿花地帯で約 3 億 8,400 万ポンドの綿花を生産していたが、ウッドバリーは「あと 50 万エーカー開拓し、10 万人労働者を増やせば 1 億 5,000 万ポンド以上、生産額を増やせる」ことを報告し、労働力価格が上昇している点を懸念事項として指摘しつつも、アメリカが綿花生産に適した土壌を有する利点があること、技術面でも競争国より優れている点を強調した。ウッドバリーの報告は南部綿花の収益への強い信頼、生産継続への自信と楽観で彩られていると同時に、当時イギリスとアメリカ北部で沸き起こった奴隷制廃止運動、自由州の拡大を目指す北部諸州の動向、南部内での自由貿易

(1) 本稿において「西インド諸島」（英語表記 West Indies）はカリブ海諸国全域を指す。

への反発の動きなどに対抗する意図もあった。綿花がもたらす収益は生産地の南部だけでなく、北部貿易商・金融業を中心に、アメリカ全土に還流していたことを南部指導者層は承知しており、彼らの自信の裏付けとなっていたことを示す報告であった。⁽²⁾

ウッドバリーの報告の翌年、世界規模の恐慌の発生が南部の金融システムを崩壊させ、綿花と奴隷の価格が急落する。長引く不況の影響から南部指導者層が恐慌の要因や経済構造の改革を検討し始めた矢先、綿花需要は1840年代に再び上昇に転じる。その後は南北戦争に至るまで、綿花生産とその収益、奴隷価格についても上昇傾向が継続した。ジェイムズ・ヘンリー・ハモンド (James Henry Hammond) の有名な「綿花は王様」宣言 (1858年) は、1840年代以降の南部綿花の揺るぎない成長を示す象徴的なフレーズとなった。⁽³⁾

本稿では、南北戦争前、特に1830年代以降の綿花生産の上昇について、その原点となった個別の綿花生産農家での生産の効率性向上のための経営の特徴について分析することを目的としている。ウッドバリーの述べた「あと50万エーカー」を実現するには綿花生産地帯にあたる南西部への継続的な土地投資が必要であったし、より優れた技術の導入も必要であったが、それを実践したのは綿花プランテーションを所有したプランターであり、綿花栽培を担った奴隷とその労働監督者であった。綿花生産の中心となった南西部の何千エーカーにもまたがる各プランテーションでは、ときに何百もの奴隷を用いて効率的に作物を生産する必要があった。本稿ではこうした個々のプランテーションでの経営上の工夫・努力もまた、綿花輸出の拡大の重要な一因であったことを、個別事例の検討を通じて論じ、複数の大規模プランテーションの遠隔地経営のあり方とその意義について考察する。

南部奴隷制経済と綿花生産についての研究の蓄積は多い。奴隷制経済とその労働の効率性については、それまでのルイス・C・グレイ (Lewis C. Gray) やケネス・M・スタンプ (Kenneth M. Stamp) らの研究を土台に、ロバート・W・フォーゲル (Robert W. Fogel) ら経済史家の計量的研究を機に継続的に研究が進められた。フォーゲルらの研究は、ユージーン・D・ジェノヴィーシ (Eugene D. Genovese) ら歴史家によるプランテーション社会の前近代性を強調した研究やそれに続いた一連の奴隷の主体性を重視した諸研究と牽制しあいながら、奴隷制が有益な経済・労働システムであって、奴隷制プランテーションは収益力が高く効率的で自由労働を使う農場以上の競争力を持っていたことを示した。⁽⁴⁾ プランテーションの経営が、近代的ビジネスの要素を有していたことは、スタンプやジェイコブ・メツァー (Jacob Metzger) らの研究でも明らかにされている。スタンプは、プラン

(2) U.S. Congress, House, Treasury Department Report by Levi Woodbury, *Cotton, Cultivation, Manufacture and Foreign Trade of*, House Document No. 146, 24th Congress, 1836, 1st Session, 8–12, 14–5.

(3) 奴隷価格は南部内で取引された奴隷の価格のことである。James Henry Hammond, *On the Admission of Kansas, Under the Lecompton Constitution*, Speech before the U.S. Senate, March, 1858.

テーションを「農場における工場」と指摘し、プランターがプランテーションを経営するにあたって、労働管理や生産体系の組織化を重視していたことを論じている。⁽⁵⁾

一方、南部の綿花生産についても、1960年代以降、ロバート・ゴールマン (Robert Gallman) とウィリアム・N・パーカー (William N. Parker) によって収集された大量の綿花プランテーションのデータ分析による一連の研究が始められた。19世紀の急激な綿花生産の成長の背景については、ギャビン・ライト (Gavin Wright) らによる綿花需要動向と労働市場に関する研究、ジョン・H・ムーア (John Hebron Moore) やハロルド・D・ウッドマン (Harold D. Woodman) による綿花生産体系や資本流通体制の分析によって明らかにされている。⁽⁶⁾ 綿花経済の継続的な成長を支えた要因についても、例えばフォーゲルとスタンリー・L・エンゲルマン (Stanley L. Engerman) は、1850年代の綿花生産拡大の内訳について、生産高増加の8%は西部領域の新たな綿花地帯の開拓、41%が各州の綿花生産地の土地改良、42%は他の生産物にあてていた土地を綿花生産地に転換したことによる生産量増加、残り9%がその他、肥料の改良や労働対土地の比率などに要因を見出している。このように、綿花の隆盛を支えたのは土地と労働資本投入の側面からの分析が主流で、それ以外の要因については列挙されても経済史的には詳細な分析の対象とはなっていない。⁽⁷⁾

-
- (4) Lewis C. Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860*, 2 Vols. (Washington: Carnegie Institute of Washington, 1933); Kenneth M. Stamp, *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South* (New York: Vintage, 1956); Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery* (Boston: Little Brown, 1974); Eugene D. Genovese, *The Political Economy of Slavery: Studies in the Economy and Society of the Slave South* (New York: Vintage, 1965); Eugene D. Genovese, *Roll, Jordan, Roll: The World the Slaves Made* (New York: Pantheon, 1974). 一連の経済史研究は Robert W. Fogel, *Without Consent or Contract: The Rise and Fall of American Slavery* (New York: Norton, 1989) が一つの区切りとなった。2003年の著作においてフォーゲルは奴隷制経済研究史を振り返り、改めてその有効性を強調した。Robert W. Fogel, *Slavery Debates, 1952-1990* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2003).
- (5) Jacob Metzger, "Rational Management, Modern Business Practices, and Economies of Scale in the Ante-Bellum Southern Plantations," *Explorations in Economic History*, 12 (April 1975), 123-50.
- (6) William N. Parker ed., *The Structure of the Cotton Economy of the Antebellum South* (Washington: Agricultural History Society, 1970); Stuart Bruchey ed., *Cotton and the Growth of the American Economy, 1790-1860: Sources and Readings* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1967); Gavin Wright, *The Political Economy of the Cotton South: Households, Markets, and Wealth in the Nineteenth Century* (New York: Norton, 1978); John Hebron Moore, *The Emergence of the Cotton Kingdom in the Old Southwest: Mississippi, 1770-1860* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1988); Harold D. Woodman, *King Cotton and His Retainers: Financing & Marketing the Cotton Crop of the South, 1800-1925* (Lexington: University of Kentucky Press, 1968).
- (7) Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, "Explaining the Relative Efficiency of Slave Agriculture in the Antebellum South," *American Economic Review*, 12 (1977), 275-96.

本稿はこうした研究の蓄積の上に、南西部で複数の大規模綿花プランテーションを運営したプランターの資料を分析する。これまで様々な研究で断片的に扱われてきた、大プランテーションにおける経営実態の中でも、あまり詳細に分析されていない労働管理、自給体制、作物品種やプランテーション間の分業体制などに焦点を当て、こうした要素が綿花生産拡大に意義ある貢献をしたことを示す。

なお、本稿で扱うプランターは1860年時点で南西部3州に10前後のプランテーションを持ち、500人以上の奴隷を所有していた。1860年に500人の奴隷を所有していたプランターは奴隷州全体でも20人に満たず、彼は当時のプランターの典型ではない。したがって、彼のプランテーション経営を考察することで当時の南部の平均的なプランター像を明らかにすることにはならない。しかし、19世紀前半の南部綿花生産の拡大の要因を明らかにするという視点から考えると、こうした大規模綿花プランテーションにおける経営改善への取り組みは決定的な意味を持つが、そこでの監督者による奴隷管理方法や綿花収穫の改良が進んでいた実態はこれまでの研究では軽視されてきた。したがって本稿では大規模プランテーションの経営の実態を具体的な事例の考察の中で明らかにし、綿花生産の拡大に貢献した要素について考察する。

I. アメリカ南部と綿花経済の成長

アメリカにおける綿花生産は独立戦争後に発達し、初期には東海岸沿いで生産されたが、やがて内陸での生産に適した綿花が開発され、綿繰機の開発などの技術革新を経て、南西部のブラック・ベルト地帯へと生産の中心が移っていった。綿花の西進とともに奴隷も南西部に移動させる必要から、南部内の奴隷取引が活発に行なわれるようになった。⁽⁸⁾

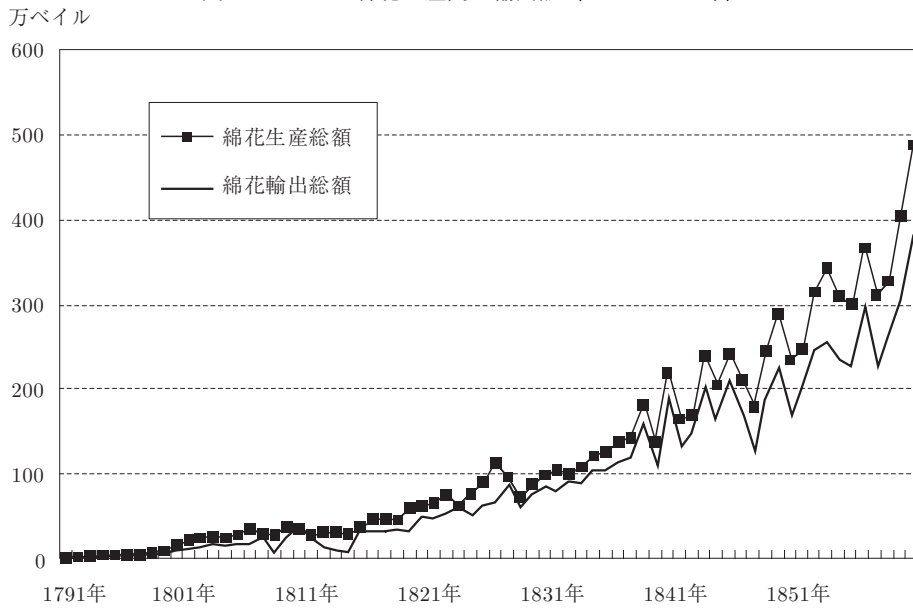
1820年から1860年の間に綿花生産高は年間平均6%近い成長率を示す一方、綿花の実質価格は年平均0.8%の推移で低下の傾向を示した(図1)。同時期にイギリスの綿花輸入量は10倍に増え、とりわけリバプールは常にその8割以上を輸入していた。1830年代にアメリカ・リバプール間の船舶数は年間500を超え、1850年代半ばには700隻にのぼった。アメリカの主要港からイギリスへの綿花の輸出は表1に示されている。⁽⁹⁾

南部内で最も綿花生産に適した地域はミシシッピ川河口付近のルイジアナ、ミシシッピ、アーカ

(8) 綿繰機の影響については Angele Lakwete, *Inventing the Cotton Gin: Machine and Myth in Antebellum America* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2003) 参照。

(9) Fogel and Engerman, *Time on the Cross*, 91–93; Fogel, *Without Consent or Contract*, 71, 95; David M. Williams, “The Shipping of the North Atlantic Cotton Trade in the Mid-Nineteenth Century,” in *Merchants and Mariners: Selected Maritime Writings of David M. Williams*, Lars U. Scholl, ed. (St. Johns, Nfld.: International Maritime Economic History Association, 2000), 58–9.

図1 アメリカ綿花生産高・輸出額（1791-1860年）



出典) Stuart Bruchey, "Statistics on Cotton and Internal Commerce," in *Cotton and the Growth of the American Economy, 1790-1860*.

表1 アメリカ主要港からのイギリスへの綿花輸出（1830-32年, 1853-55年）

	1830-32年		1853-55年	
	バイル	%	バイル	%
ニューオーリンズ	623,631	33.7	2,453,150	50.9
モービル	161,362	8.7	683,770	14.2
サバンナ	371,004	20.0	386,848	8.0
チャールストン	424,768	22.9	558,378	11.6
バージニア*	63,972	3.5	500	-
フロリダ*	-	-	43,708	0.9
ニューヨーク	189,701	10.2	654,360	13.6
その他	17,421	0.9	38,899	0.8
計	1,851,859	-	4,819,613	-

注) バージニアとフロリダは州内の主要港からの出荷量の合計。

出典) E. J. Donnell, *Chronological and Statistical History of Cotton* (New York, 1872); David M. Williams, "Shipping," 56.

ンソー各州の沖積地層、ルイジアナ州のレッド・リバー沿い地区一帯など、1800年以降に連邦に加入した地域に集中している。開拓の前線が同地区に到達すると綿花生産は飛躍的に上昇し、その利益は土地と労働力に再投資された。綿花は大規模生産しかできない米や砂糖と異なり、小規模な土地で奴隷労働力がなくても生産可能であったため、アメリカ南部の綿花生産者の平均奴隷所有数は10人以下であった。1850年に10人以下の奴隷しか持たない奴隷所有者が全奴隷所有者の7割を占

め、20人以下の奴隷所有者が全体の9割を占めた。⁽¹⁰⁾

ミシシッピ州デルタ地帯の中心であるナチェズ地域は18世紀初頭にはルイジアナ植民地の北端拠点としてフランス支配下にあり、恵まれた土壌で奴隷を用いたタバコ生産が早くから発達した。その後ミシシッピ地区はフランスの影響力の弱体化とともに後退したが、ナチェズは鹿皮取引の拠点の一つとして交易が続いた。1763年にフランスが撤退するとルイジアナはイギリスとスペインの両支配に分断され、停滞する鹿皮取引に代わってイギリス商人がナチェズへの移民誘致に力を入れたため、18世紀半ばにはメリーランドやカロライナから奴隷を伴った移住者が急増した。その後、スペイン支配下でタバコとインディゴのプランテーション生産が復活したが、1795年サン・ロレンゾ条約によって同地区が連邦に統合され、1798年にミシシッピ領政府が設立される頃には、綿花生産が開始されていた。ムーアによると、1795年から1800年の間に同地でタバコを生産していた全ての奴隷が綿花労働に転換させられた。タバコと綿花の生産は開墾技術や農具の使用法、組労働を採用した奴隷管理など類似点が多く、この転換は比較的容易であった。ミシシッピが1817年に州に昇格すると、大量の移住者が綿花の富を求めて移住し、1820年代にはそれまで綿花生産の中心であったサウス・カロライナやジョージアが後退し、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナが生産の中心となった。⁽¹¹⁾

一方、ルイジアナ植民地は当初タバコ、インディゴ、米など様々な輸出作物生産を試みたがいずれも商業作物としては成功しなかった。フランスからの支援も不十分で移民も増えず、1763年のパリ条約によってスペインに譲渡されたが、イギリスも同地に権益を持ち、諸国間の競争が絶えなかった。スペイン政府がタバコの専売を行なったため一時的にルイジアナのタバコ生産が増えたが、定着しないまま1802年再度フランスの手に渡り、1803年アメリカが購入した。なお、世紀転換期にはサンドマングでの革命を逃れた元奴隷の難民が持ち込んだと言われる砂糖生産が飛躍し、ルイジアナは砂糖生産に特徴づけられた大西洋貿易で最後にその生産を開始した地区となった。⁽¹²⁾この植民地の中心都市として栄えたのがニューオーリンズであった。ニューオーリンズは南部最大の綿花出荷港として多くの商人や船舶業者が集まり、南部の金融業の中心としても発展していく。南部の4大輸出港はニューオーリンズ、モービル、チャールストンとサバンナであり、これら4つの港から南北戦争前の40年間の綿花の8割以上が出荷された。⁽¹³⁾

綿花の大半はリバプールに出荷されたが、ルーアブル、ブレーメン、ロッテルダムなどヨーロッパ大陸諸都市もアメリカの綿花の重要な輸出先であった。北部ではボストンがニューイングランドの繊維産業に供給する綿花の玄関口となり、ニューヨークは大西洋貿易の中継地点として重要な位

(10) Wright, *Political Economy*, 22; Bruchey, *Cotton and Growth*, 165.

(11) ミシシッピについては David J. Libby, *Slavery and Frontier in Mississippi, 1720–1835* (Jackson: University Press of Mississippi, 2004), 8–21; Moore, *Emergence*, 76–7; Bruchey, *Cotton and Growth*, 18–20 参照。

置を築いた。⁽¹⁴⁾ 19世紀の最初の20年間は、イギリスとの戦争による混乱でアメリカにおけるイギリスの商業・船舶事業が停滞し、連邦議会も沿岸貿易から外国船を締め出すことを決定したため北部商人の独占状態となり、さらに1819年のニューヨーク・リバプール間の定期船運航によって国内船舶業におけるニューヨークの絶対的地位が確立した。輸送手段と金融面での有利さからニューヨークはいわゆる「綿花の三角貿易」の中継地点となった。南部の綿花の多くは直接イギリスに運ばれたが、イギリスから戻る船舶は様々な品目や移民を乗せて一旦ニューヨークに停泊後、南部に戻るルートを取った。南部の港に定住した北部貿易商の代理人らが輸送貨物を準備し、その費用を徴収したため、委託料金、保険、輸送料金や取扱費用など、綿花収益の多くが北部商人の手に渡ることになった。ある南部の新聞では「ニューヨークは、鉄道や航海可能な河川を用いて深南部にまで手を伸ばし、我々の利益を自分のものにし、(貿易の)各段階で我々に課税し、我々を完全に滅ぼす直前まで傷めつけ、我々を十分に疲弊させる」と述べている。⁽¹⁵⁾

1830年代後半の世界的な不況は、南部経済に北部資本が欠かせないことを証明することになった。恐慌によって北部からの資金提供や正貨の流入が不足し、北部紙幣の需要、北部でのポンド建ての手形の売り上げが減少し、綿花の価格も低下した。さらに1840年代初頭の保守的な財政政策の結果、以前の手形の返済は滞り、商人はその回収に苦労したが、1840年代に綿花需要が回復し、1850年

(12) 仏領ルイジアナの歴史について、Bradley G. Bond ed., *French Colonial Louisiana and the Atlantic World* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2004) 序章参照。サンドマングの革命で1791年から1810年までの間にルイジアナに漂着した元奴隷の難民は2万5,000人にのぼった。Nathalie Dessens, “From Saint Domingue to Louisiana: West Indian Refugees in the Lower Mississippi Region,” in *French Colonial Louisiana*, Bond ed., 244–64; Glen R. Conrad and Carl A. Brasseaux ed., *The Road the Louisiana: The Saint-Domingue Refugees, 1792–1809* (Lafayette: University of Southern Louisiana, 1992). 砂糖生産は生産地域が限定されたため綿花のように国政に影響を与えるような作物にはならなかったが、ルイジアナの人口構成やニューオーリンズの発達に影響した。同地区の砂糖産業についてはRichard Follet, *Sugar Masters: Planters and Slaves in Louisiana’s Cane World, 1820–1860* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2005) 参照。

(13) 初期のニューオーリンズについてはJohn G. Clark. *New Orleans, 1718–1812: An Economic History* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1970), 金融についてはGeorge D. Green, *Finance and Economic Development in the Old South: Louisiana Banking, 1804–1861* (Stanford: Stanford University Press, 1972) 参照。Williams, “Shipping,” 57–8.

(14) ニューヨークからの綿花の出荷は1761年から確認できる。ニューYork港の南部にとっての重要性についてはRobert G. Albion, *The Rise of New York Port* (New York: C. Scribner’s Sons, 1939); Phillip Foner, *Business and Slavery: The New York Merchants and the Irrepressible Conflict* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1941) 参照。

(15) 引用はFoner, *Business and Slavery*, 10より。Brian Schoen, “The Fragile Fabric of the Union: The Cotton South, Federal Policies, and the Atlantic World, 1783–1861” (Ph.D. diss., University of Virginia, 2004), 90; Edwin J. Perkins, *Financing the Anglo-American Trade: The House of Brown, 1800–1880* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1975), 4–16も参照。

代になると短期・長期の手形が自由に割引され、先の収穫を担保にした借入れが再び活発化した。⁽¹⁶⁾ 恐慌とそれに続く不況は、綿花プランターがプランテーションの経営に関して、また南部経済全体についてその方向性を検討する一つの契機となった。この時期、南部人の中には綿花一辺倒ではなく地域経済を多様化する必要性を訴える指導者や、北部への金融依存を打破する論調も現れた。南部が支持した自由貿易政策はリスクが高かったが、綿花需要の回復を機に南部のプランターはより一層自由貿易を信奉し、そのリスクへの安全弁として各生産者の経営手腕と危機対応能力の蓄積を重視するようになっていた。次節で事例として登場するバージニア出身の商人が西部へ移住した時期は、南部社会のそのような転換期にあった。

II. 西部綿花地帯への移住

ここでは南東部バージニア州から南西部綿花地帯への移住について、バージニアで活動した奴隷商人ライス・C・バラード (Rice C. Ballard) のミシシッピ移住後の資料を中心に分析する。バラードの奴隷商人としての活動の詳細は省くが、彼はバージニア州リッチモンドを中心に 1820 年代から奴隷取引商人としての活動を開始し、1830 年代に南部最大級の奴隷取引会社とパートナーシップを結ぶことで奴隷取引から多額の富を得、1836 年秋に西部ミシシッピ州のナチェズに移住し綿花プランターとして再出発している。⁽¹⁷⁾

バラードは 1800 年頃生まれ、1860 年頃亡くなったとされている。彼は晩年、多くの州に綿花プランテーションを所有し、複数の州のセンサスに登場する。しかし、結婚後は妻の出身地であるケンタッキーの住民とともに同州に住んでおり、ケンタッキーが拠点と考えてよい。彼は 1840 年にケンタッキー州ルイビル出身のルイーザ (Louisa Berthe) と結婚し、娘 3 人を授かっている。妻子の年齢は 1860 年ケンタッキーのセンサスで妻は 37 歳、娘のエラは 19 歳、双子のアンとシャーロットは 12 歳であった。バラードは 60 歳で、ジェファソン郡にあたるルイビル第 3 地区に居住し、出身地はバージニア、職業は綿花プランターで、州内所有不動産の価値が 3 万ドル、個人資産が 3 万 5,000 ドルと記されている。1850 年の同州のセンサスでは、職業はプランターで、不動産と個人資産を合わせた総資産額が 8 万 5,000 ドルになっている。一方、ルイジアナ州滞在時の住所であるマディソン教区の 1860 年の記録では、綿花プランテーションを中心とした州内所有不動産価値は 40 万ドル、個人資産も 15 万ドルにのぼった。⁽¹⁸⁾

(16) 綿花の北部商人による取引については Woodman, *King Cotton and His Retainers* 参照。

(17) Rice C. Ballard Collections (以下 Ballard Papers と略す) Southern Historical Collection, University of North Carolina at Chapel Hill 所蔵。バラードの奴隷取引活動については拙稿「南部奴隷取引の発展およびその拡大と支持の背景——ネットワークによる経営戦略と世界観の形成——」『アメリカ経済史研究』7号 (2008年11月) 21-40頁。

バラードの奴隷所有数についてもセンサスからいくつか確認できる。1860年にルイジアナ州キャロル教区の第1地区に所有していた奴隷は110人（男性56人、女性54人）と記録されており、奴隷が住む奴隷小屋の数が27軒、しかも1棟の「ゆったりとした病院」が設置されていると記録されている。同州マディソン郡では2つのプランテーションで155人の奴隷を所有し、奴隷小屋は33軒であった。さらに、アーカンソー州チコット郡のルイジアナ・タウンシップでは1860年時点で41人（男性21人、女性20人）の奴隷を22軒の奴隷小屋で所有していたことが示されている。ミシシッピ州の1850年の記録からは同州クレイボーン郡に70人（男性33人、女性37人）の奴隷を所有していた。⁽¹⁹⁾バラードは南北戦争前の20年間に合計10以上のプランテーションを所有することになるが、1860年の時点ではミシシッピ、ルイジアナ、アーカンソーの3州にまたがって合計500人以上の奴隷を所有し、南北戦争前の10年では、所有するプランテーションからの利益が合計33万ドルにのぼったと推測されている。⁽²⁰⁾

バラードは1840年代にケンタッキーに移り住む一方、判事兼弁護士としてナチュズ地区で活動していたサミュエル・B・ボイド (Samuel B. Boyd) のビジネス・パートナーとなり、彼の指示から南西部諸州内のプランテーションを次々と購入し、その多くをボイドと共同で経営することになった。その結果、バラードはケンタッキー在住の遠隔地経営者であったが、1年の半分以上はミシシッピを中心に西部で過ごし、生産状況を観察することになった。⁽²¹⁾

(18) 1860年のルイジアナのセンサスではルーザ54歳、エラ16歳、アンとシャーロットは9歳となっており、大きく異なる。ケンタッキー、ルイジアナ、ミシシッピのセンサス (U.S. Census, 1860, Population, Slave Schedule) の情報は <http://www.ancestry.com> より (2005年8月11日アクセス)。ルイジアナについては Joseph Karl Menn, *The Large Slaveholders of Louisiana, 1860* (New Orleans: Pelican Publishing Company, 1964) も参照。

(19) U.S. Census, 1860, Population, <http://www.ancestry.com> (2005年8月11日アクセス)。

(20) William K. Scarborough, *Masters of the Big House: Elite Slaveholders of the Mid-Nineteenth Century South* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2003), 133-4, 124-5. スカボローによると1860年のバラードの奴隷所有数はミシシッピ州クレイボーン郡 (カーナック) で120, ルイジアナのキャロル教区で110 (アウトポスト), ルイジアナ州マディソン教区 (エルコ, ダンロップ) で155, アーカンソー州チコット郡 (ワグラム) で76, ミシシッピ州ウォーレン郡 (マグノリア, ローレル・ヒル) で37, ケンタッキー州ルイピルの自宅に4で計502人と算出しているが、多くはバラードとボイド両名の共有になっている。カッコ内はプランテーション名で筆者による記入。1860年のルイジアナのプランテーションについては Menn, *Large Slaveholders*. マディソン教区でのバラードの資産内訳は以下の通り。奴隷155人、奴隷小屋33軒、不動産40万ドル、個人資産15万ドル、耕作地1,800エーカー、未耕作地1,500エーカー、農場価値20万ドル、農機具・機械の価値7,000ドル、馬15頭、ロバとラバ58頭、酪農牛15頭、雄牛19頭、羊80頭、豚25頭、その他家畜40頭、家畜価値1万1,000ドル、インディアン・コーン8,000ブッシェル、綿織済綿花400ポンド梱で280, 羊毛400ポンド。U.S. Census, 1860, Louisiana, Population.

表2 マグノリア・プランテーションの奴隷（1838年、1848年）

	30歳以上		20-29歳		10-19歳		9歳以下		合計 人数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
1838年									
男性奴隷	9	14.3	21	33.3	29	46.0	4	6.3	63
女性奴隷	13	15.1	25	29.0	39	45.3	9	10.5	86
1848年									
男性奴隷	8	17.0	19	40.4	9	19.1	11	23.4	47
女性奴隷	12	23.5	19	37.3	6	11.8	14	27.5	51

出典) Vol. 11, folder 429, Magnolia Plantation Journal, 1838-1840, Ballard Papers; Vol. 23, folder 442; Vol. 39, folder 465, Magnolia Plantation Journal, 1848, Ballard Papers.

III. バラードとボイドの「綿花王国」

1) プランテーション建設と奴隷

バラードの移住後、1838年に彼の経営の拠点となるマグノリア・プランテーション（以下、マグノリア。以後プランテーションの名称後の「プランテーション」は省略）がミシシッピ州ウォーレン郡で操業を開始した。彼は、ミシシッピに移住して2年以内にマグノリアを購入・建設し、生産力の高い10歳から30歳までの奴隷を中心に、計149人所有した。⁽²²⁾当初149人いたマグノリアの奴隷の一部は、バラードとボイドが次々に購入した他のプランテーションに供給された可能性が高く、奴隷数が減少していく（表2）。なお、1838年5月にマグノリア内で綿花生産にあてられた土地は772エーカーで、主食であったトウモロコシ生産は110エーカーの農地で耕作された。⁽²³⁾

バラードの経営パートナーとなったサミュエル・ボイドは北部メインの出身で、1830年代には既

(21) 遠隔地経営 (absentee ownership) については、西インド諸島のプランテーションは大半がこの形態をとり、南部でもロウカントリーの米作地などでは広く見られた。1860年のルイジアナにおいてはミシシッピ川沿いの4地区（キャロル、コンコーディア、マディソン、テンサス）で遠隔地経営率は47.8%にのぼり、マディソン教区では40.1%であった。この4地区を除くルイジアナの遠隔地経営率は15.2%であった。Menn, *Large Slaveholders*.

(22) 生産年齢は、奴隷の最も生産性の高いとされる年齢で研究者によって年齢の範囲は諸説あるが、15歳から25歳までを示す場合が多い。奴隷取引価格に反映された生産力が高いとされた年齢範囲は男性では19歳から25歳、女性は16歳から20歳程度であった。Michael Tadman, *Speculators and Slaves: Masters, Traders and Slaves in the Old South* (Madison: University of Wisconsin Press, 1989), 25, 289-91.

(23) マグノリアは少なくとも以下9つの耕作地に分割されていた。River field, Hill field, Canal field, Gin field, Long field, Race field, Bridge field, Petit field, Stable field の計9耕作地。マグノリア所有の家畜と機材については Vol. 40, folder 466, Magnolia Plantation Journal, 1849, Ballard Papers などに記載。

にナチェズ地区の弁護士として政治家や権力者ともつながりを持つ人物であった。サミュエル・ボイドの兄弟であったジェイムズ・ボイド (James Boyd) も同地区に住み、バラードとサミュエル・ボイドの経営のエージェントとなった。ボイドはバラードの綿花ファクター (委託販売商人) となったニューオーリンズのナル・アンド・コックス社とも良好な関係を保ち、ファクターの情報に多大な信頼を寄せていた。⁽²⁴⁾ ボイドの職務は多岐にわたり、各プランテーションで不足している品目や、奴隷に与える食料や必需品についてファクターを通して注文するだけでなく、あるプランテーションで食料が不足した場合に近隣の他のプランテーションで余った食料を手配することもあった。大規模プランテーションには病院設備が設けられていたが、ボイドは各プランテーションで黄熱病やコレラなどの疫病が広まった際に用いる薬剤を常備し、近隣で疫病発生の情報が入ると、奴隷を別のプランテーションに一斉に移動させることもあった。また、綿花の摘取りの時期には、摘取り手が不足しているプランテーションに、別のプランテーションから数人単位で貸し出す手配もした。例えば、「2 週間、20 人」、または数日間「10 人から 15 人ほどの摘取り手が必要」な個所へ、一つの農場から別の農場へ奴隷が移動した。マグノリアの摘取りの記録によると、1854 年 11 月の大部分、20 人のマグノリアの奴隷がエルコとカーナックに貸し出され、1855 年 11 月の第 3 週にはマグノリアのほぼ全ての奴隷がエルコに貸し出されている。また、収穫時期でない 1845 年 1 月にマグノリアの奴隷 10 人がパイン・マウントに貸し出されていることから、摘取り時期以外でも、近隣の農場間の奴隷の貸借は行なわれていた。⁽²⁵⁾

マグノリアに加えて、バラードがミシシッピ移住後、早くから綿花生産を開始した農場はブラッシー・バユー、プロビデンス、ゴールドデン・プレインズ (1843 年に 1 万 5,000 ドルで売却)、クアトルバム (ミシシッピ州ヤズー郡) ⁽²⁶⁾ である。さらに数年内にウッドランド、カーナック (ミシシッピ州クレイボーン郡)、アウトポスト (ルイジアナ州キャロル教区、別名ピーカン・グローブ)、エルコ (ルイジアナ州マディソン教区)、エルク、ローレル・ヒル (ミシシッピ州ウォーレン郡)、レパイン、ワグラム (アーカンソー州チコット郡)、パイン・マウント、ダンロップ (ルイジアナ州マディソン教区) がある。

(24) バラードの綿花は彼のファクターとなったニューオーリンズのアルバート・E・ナルがその販売を代行した。ナルはもともとニューオーリンズの別業者のパートナーであったが、やがて独立してデュビー、テイト&ナルという業者を設立した後、ウィリアム・コックスと提携して 1844 年にナル・アンド・コックスを設立した。1843 年 10 月 11 日, folder 65, Letters, Ballard Papers.

(25) ボイドは監督者的な役割も担っていた。例えば、1847 年 8 月 1 日には、「フォレスト・ヒルには十分トウモロコシがあるため、必要ならばカーナックに余分を回す」と手紙に記されている。folder 119, Letters, Ballard Papers. 奴隷のプランテーション間移動について、1844 年 8 月 24 日, folder 76, Letters, Ballard Papers; Vol. 19, folder 438, Magnolia Plantation Journal, Ballard Papers. Vol. 30, folder 452, Magnolia Plantation Cotton Plantation Record and Account Book, Ballard Papers.

(26) ブラッシー・バユーの所有者はフィリップ・ブリスという人物で、負債の肩代わりにバラードがブラッシー・バユーの綿花生産を代行し、その収益を獲得していた。1842 年にはその一部は売却された。Inventory of Rice C. Ballard Papers.

他にもフォレスト・ヒル、マートル・グローブなどのプランテーションが記録に登場するが、場所や情報が明確ではない。⁽²⁷⁾これらのプランテーションの多くはバラードとボイドの共同所有であったが、いずれかが単独所有者になっていた場所もあり、またバラードがボイド以外のパートナーと共同所有していたものもある。バラードがケンタッキーにいるときは、ボイドが頻繁にプランテーションの様子を報告した。さらに、サミュエル・ボイド1人ですべてのプランテーションの観察は困難であったため、ジェイムズ・ボイドと代理人のスティール (C. Steele) という人物も観察を行なった。

プランテーション操業の第一歩は十分な労働力を確保することであり、プランテーションを購入するとバラードはすぐに奴隷の購入を開始した。1842年5月には45人の奴隷を一括購入した記録があり、その後も10～20人程度の単位で、随時フォックス・オブ・ザ・ロードなど近隣市場で買い足していった。奴隷オークションの情報はエージェントらから、「ピックスバーグで多くの奴隷（一度に87人）が22日に売却予定であり…（中略）…場所はテイラー卿のプランテーションである」などと報告され、奴隷の年齢や価格についての情報も送られてきた。⁽²⁸⁾ボイドはどの職種や年齢層の奴隷が何人程度、どのプランテーションに必要であるかを報告し、それに適した奴隷がオークションに出される情報を知ると、購入を指示した。あるオークションにおいて望ましい奴隷が手に入りそうだという情報を知ると、「125人の奴隷が売却されることになっているが、20人ほど購入するように…（中略）…そのすべてがマグノリアで必要でなければ、残りは私が（他のプランテーションに）配分する」と述べていた。⁽²⁹⁾このように、バラードとボイドは南部中から情報を集めながら、プランテーションに必要な奴隷を随時補充していった。

2) 監督者の雇用と権限

経営者が決定する重要事項の一つに各プランテーションにおける監督者の雇用の問題があった。監督者はプランターや所有者に代わってプランテーションに住み、管理を代行する白人契約労働者である。遠隔地経営の場合特に、所有するプランテーション全てに適切な監督者を雇用することは容易ではなかった。マグノリアは建設初期の頃から1840年代後半まで、適切な監督者になかなか恵まれなかった。例えば、マグノリアの監督者W・J・C・ディクソン (W. J. C. Dixon) については、バラードもボイドも監督者として不適格とみなし、採用延長について「彼（ディクソン）を長期的に採用することの決定はまだ先延ばしにした方が良い」と判断している。また1844年11月に

(27) 所在地（州・郡）が判明しているものだけを記入している。

(28) 1844年1月14日, folder 68, Letters, Ballard Papers.

(29) 1850年11月20日, folder 159, Letters, Ballard Papers. ボイドはニューオーリンズ奴隷市場での奴隷価格は高かったので、購入を勧めていない。1853年にはバラードは仲介の奴隷商人ラザフォード (C. W. Rutherford) を通して25人の奴隷を購入し、メンフィス市場での購入を勧められている。1853年12月14日, folder 202, Letters, Ballard Papers. 1856年にはバージニアから一度に43人の奴隷を平均1人1,000ドルで購入し、エルコに送り込んでいる。

表3 プランテーションの監督者（1838～1859年）

マグノリア・プランテーションの監督者		その他のプランテーションの監督者	
年	監督者名	プランテーション名	年 (監督者名)
1838	McNeal	ブラッシー・バユ	1848 (L. B. Gravy)
1840	W. Buck		1852 (Robert J. Morgan)
1843	W. J. C. Dixon → Ward	パイン・マウント	1848 (A. M. Reeves)
1844	Dixon → Dowling → Ward	プロビデンス	1842 (Edward Moore)
1845	A. Stampley	カーナック	1846 (Richard Alsop)
1846	Isaac Folkes → J. H. Cox		1852 (Ben Polks → Frisk)
1847	J. H. Cox → Rice B. Read		1853 (J. Westbrook)
1848	Jacob Westbrook	クアトルバム	1842 (A. Stampley)
1849	Jacob Westbrook → R. B. Read	エルク	1848 (Graves), 1850 (J. H. Lacy)
1850	Loyd Stevenson	ローレル・ヒル	1851-52 (John H. Bailey)
1851	R. B. Read → J. B. Wilson	ラビーン	1855 (Knott)
1852	J. B. Wilson → H. Shaw → H. H. Williams	アウトポスト (ピーカン・グローブ)	1854 (H. Shaw)
1853	H. H. Williams → J. Nolley		
1854	J. Nolley		
1855	J. B. Wilson → J. Nolley	エルコ	1857 (J. B. Wilson), 1859 (J. Palmer)
1856	J. B. Wilson		

注) 上記の書簡から判明した監督者と年のみを記載している。マグノリア以外は記録が断片的である。

出典) Letters and Volumes, Ballard Papers.

は、バラードは妻への手紙の中に、「(監督者は) クリスマスまではそのプランテーションを管理することになっているが、もう1年雇うことはやめるつもりだ。別の監督者を探す⁽³⁰⁾」と書いている。実際、監督者の解雇と採用は頻繁に見られたが、確認できるバラードとボイドのプランテーションにおける監督者一覧を見ると、プランテーション間を移動した者もいることがわかり、複数年にわたって再雇用されていた優れた監督者もいたと考えられる(表3)。監督者と経営者の信頼関係が重要であるため、血縁関係者や知人を雇用する場合も一般に多く、バラードの場合も同様のケースは見られた。監督者の資質によってプランテーション内の規律や奴隷の労働の効率も大きく影響を受けたため、経営者は監督者の決定に関して迅速に対応する必要があった。

監督者の1日は日の出とともにラッパの音で奴隷を集めることから始まった。彼らの最も重要な役割は奴隷の監督・監視であったが、他にも課業を与えるなどの分業を指示し、病気などの問題が生じたときに適切に対処した。家畜の世話・準備や活動の記録、プランターへの報告などもあり、1日を通しての激務は「秩序と服従を最小限の罰則で管理すること⁽³¹⁾」が重視された。彼らには年間の

(30) 1843年10月11日, folder 65; 1844年11月2日, folder 79, Letters, Ballard Papers. 監督者については James O. Breeden ed., *Advice Among Masters: The Ideal of Slave Management in the Old South* (Westport, CT.: Greenwood Press, 1980); William K. Scarborough, *The Overseer: Plantation Management in the Old South* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1966) 参照。

賃金が与えられ、マグノリアのディクソンは1843年に年500ドル、J・H・コックス (J. H. Cox) の1847年の11カ月間の給料は457ドル37セントであった。従来の研究では、30人の奴隷を所有するプランテーションが監督者を1人雇う規模としては最も低い境界にあたり、100人の奴隷が1人の監督者が監督できる限度とみなされ、50人の奴隷に1人の監督者が最適と考えられてきた。一方、あるバージニアのプランターは奴隷数ではなく、800エーカー以上の広さのプランテーションにおいては監督者がいないと経営管理が厳しいと分析している。⁽³²⁾

監督者の交代は、プランテーション全体のモラルや奴隷の労働ベースに大きな影響を与えた。マグノリアで1844年、ディクソンが体調不良の際、別の監督者が彼の代行を務めた。当初新しい監督者の厳しい管理の評判はよく、「奴隷が彼は厳しすぎると不満を漏らしているが、それはディクソンが規律をなくしたことに奴隷がなじんでしまったから」とジェイムズ・ボイドは分析した。しかし、後にこの新しい監督者が非常に残忍でドライバーや奴隷たちと頻繁に衝突し、「あまりに過酷なペースだったので(代理人の)スティールが奴隷を守らなければいけない」事態になり、サミュエル・ボイドはこの監督者を解雇し、新しい監督者をすぐに採用したケースがあった。⁽³³⁾ 奴隷の過度な酷使に対しては、かえって奴隷労働の効率性の低下になる恐れがあり、監督者によるその加減を観察するのはボイドらの重要な役目であった。

南部プランテーションの監督者は様々な要因で解雇されたが、アルコール依存、仕事の怠慢、奴隷管理能力の欠如、ドライバーとの確執、過度の暴力、女性奴隷への性的暴力などの要因が見られた。1859年にはエルコで、監督者J・パーマー (J. Palmer) が女性奴隷との関係で解雇されているが、彼は監督職を解雇後、その奴隷と奴隷が産んだ彼の子供の購入を願い出た。その数年前にはファクターからの連絡で、綿花の梱包方法の粗雑さが原因でニューオーリンズでの取引価格が減じたことの責任を取らされる形で解雇された監督者もいた。⁽³⁴⁾ さらに、1846年の夏にマグノリアの監督者となったコックスはスティールの観察によれば、「勤勉で、作物をきれいに仕上げる」人物で、ボイドも「彼が就任したときの(荒れた)作物の状況などを考慮すると、彼はできる限りのことをやっ

(31) Metzger, "Rational Management,;" Breeden ed., *Advice*, 296-7, South Carolina Planter, *Carolina Planter*, 1 (Aug. 1844), 25-30.

(32) 監督者が必要となる奴隷数については Metzger, "Rational Management," 144; Breeden ed., *Advice*, 295, Virginia Planter, *Farmer's Register* 6 (Sept. 1837), 237-8. を、賃金については Vol. 16, folder 424; Vol. 21, folder 441, Ballard Papers を参照。

(33) 1844年8月24日, folder 76; 1844年9月1日, folder 76, Letters, Ballard Papers. ダウリングは元奴隷取引パートナーのアイザック・フランクリン (Isaac Franklin) のプランテーションで監督者経験があった。ドライバーは、奴隷のリーダー格で「監督者の下でプランテーション内の秩序を維持し、奴隷小屋周辺の平穏、仕事の遂行、朝奴隷を仕事場に移動させるなど、監督者が監視する程度の職務を現場で監督する義務」があった。Breeden ed., *Advice*, 57, South Carolina Planter, *DeBow's Review*, 22 (Jan. 1857), 38-44; *Advice*, 55, Mississippi Planter, *DeBow's Review*, 10 (June 1851), 621-7.

(34) Breeden ed., *Advice*, 295, Virginia Planter, *Farmers Register*, 1 (Feb. 1834), 564-5.

る」と評価した。しかし1年後、スティールによると、コックスは「急激に飲酒が増え、嫌な、嘘の多い」人物になり、監督能力も低下し、「(あれほどの規模の)プランテーションを彼の指揮下に置くには不適切」と判断した。その年度はマグノリアで57人の奴隷がいたが、コックスは飲酒しながら奴隷の少年ビルを鞭打ちで極限まで傷つけ、犬にビルを噛ませるなど凶暴さを増し、解雇に至った。⁽³⁵⁾

コックス解雇後のマグノリアは荒れ放題の無秩序な状態で残された。引き継いだ監督者はバラードの甥のライス・B・リード (Rice B. Read) で、その報告では綿花とトウモロコシ農地の大部分は草に覆われ、肩の高さまで草が生え、農地は鋤や鋤による耕作形跡がなく、食料が足りず家畜の飼料とともに急遽購入せざるを得なかった。農地の溝や農具も損傷が激しく、綿繰機も「腐敗した種が固まって詰まり、小屋の板などが崩れている」状態で、奴隷は「これまで管理したどの奴隷よりも悪く、最も労働できない集団で仕事が進まず、しかも仕事が遅い」状態であった。⁽³⁶⁾ このときは、監督者の資質の低下で奴隷の生産力や農場全体の生産機能が低下したため、その後の選定は慎重かつ速やかに行なわれる必要があった。リードは、マグノリアの立て直しに尽力し、バラードやボイドの助言の下で新たに規律正しい秩序ある監督体制を作り上げようとした。リードはその後も期間をあけて再雇用されており、リードに続くウェストブルック (Westbrook) はバラードの別のプランテーションでも再雇用されるなど、監督者としての手腕は高く評価された。1850年代までにリードとウェストブルックによるマグノリアの立て直しは実現し、それは後で見ると、綿花収穫の安定と、マグノリアが、近隣プランテーション間における奴隷労働の分配と機械による収穫の最終工程の拠点としての役割に重心を移しつつある時期でもあった。その後のマグノリアの監督者は初期の頃ほど様々な問題が発生した形跡は書簡からは確認できない。ウィルソン (Wilson) は定期的に雇用され続け、ショー (Shaw) もマグノリアでは短期間であったが、後にアウトポストで再雇用されている。⁽³⁷⁾

新しい監督者候補は南部には多く存在した。監督者の雇用を求める宣伝広告は当時の南部では常に見られ、監督者を探しているという情報が出れば、直接候補者がプランターに雇用を願い出ることもあった。バラードは1847年に監督者を探していたが、2人の人物から監督者として雇ってほしいという手紙を受け取っており、その1人、グレイビー (L. B. Gravy) をブラッシー・バユーで採用している。グレイビーについてはバラードの知人のハンフリーズ (D. S. Humphreys) という人物から、「彼を雇うことは問題ない。この9カ月、彼を雇っていた」こと、また、ハンフリーズが甥

(35) 1847年5月31日, folder 111, 1847年6月10日, folder 112, Letters, Ballard Papers.

(36) 1847年9月20日, 1847年9月25日, folder 118, Letters, Ballard Papers. カーナックのリチャード・アルソップ (Richard Alsop) はバラードのバージニアでの奴隷取引パートナーの遠縁にあたる人物で、マグノリアやクアトルバムのA・スタンブリー (A. Stampley) もバラードの親戚関係であった。

(37) H. H. Williams は他の監督者に比べると評価は低かったことが書簡に登場するが、大きな問題を起こすことはなかった。1853年7月22日, folder 195, Letters, Ballard Papers.

とパートナーシップを作り、甥を監督者として雇うことになりやむなく解雇した状況を知らされたため、躊躇なく採用を決定した。バラードの下には頻繁に監督者候補が雇用を願い出て自らを売り込むケースが見られ、前職での評判などを聞きながら、より好ましい人物の採用を進めていった。⁽³⁸⁾

全てにおいて満足に仕事を遂行できる監督者を探すことが困難であったことは初期のマグノリアでの監督者交代の頻度からもうかがえる。しかし、当時の南部プランテーションの監督者は、長期間一カ所に留まって雇用されること自体、稀であった。上記に見たように、息子や甥など親戚筋を雇用する場合は、監督者として経験を積んだ後、いずれ独り立ちすることが念頭にあった。より一般的であったのは、よりよい条件の雇用先に移動していくことであった。実際、パイニー・マウントでは「監督者がより高い賃金のオファーを多く受けており、彼は去る恐れがある」とボイドが報告し、「彼が去った場合、代理を見つける必要がある」とバラードに伝えており、高賃金での引き抜きも見られた。⁽³⁹⁾

また、監督者は経営者に代わって農場管理にあたるため、農場内における絶対的な権威を誇示する手段として、また奴隷を確実に労働させるために、暴力を用いていたことは当時の記録にも多く残されている。監督者は鞭を持って農場を巡回し、プランテーションの労働生産性を維持するために、労働が基準に満たない奴隷に対して体罰を与えていた様子は、「残忍で非人間的な」監督者像として頻繁に描かれた。そのため、奴隷の敵意は経営者・所有者ではなく監督者に向けられ、監督者が奴隷の襲撃の対象になることもしばしばあった。監督者としては、奴隷の生産性を下げない限界のところでの体罰は必要であり、経営者にとってはその体罰が度を越していないか、その見極めが監督者雇用の際、重要視された。プランテーションを見まわったボイドやスティールにとっては、プランテーション内の規律とともに、監督者がどのような手段で、どれだけ奴隷労働の効率的使用を実現しているかが、監督者の優劣を決定していたと言える。⁽⁴⁰⁾

マグノリア以外のプランテーションの記録が断片的であるため明確ではないが、監督者として信頼できる同一人物が別のプランテーションでローテーションのように採用されていた可能性は高い。マグノリアだけでなく、他のプランテーションにもいたウェストブルックやウィルソンはその例であろう。経営者側は監督者の採用を厳重に行い、監督者への指揮とプランテーション内での規律について細かく設定して、管理が末端まで行き届くよう徹底した。そうした中で、プランターからの信頼を得た、より優れた人物の採用が固定化し、それらの人物が年度によってプランテーション間を移動しながら監督していたことがうかがえる。

(38) 1847年11月23日, folder 120, 1847年11月29日, folder 120, Letters, Ballard Papers.

(39) 1847年11月17日, folder 120, Letters, Ballard Papers.

(40) 特に監督者と、奴隷の組のリーダーであったドライバーとの確執は頻繁に見られ、以下に多くの事例がある。John W. Blassingame, *The Slave Community: Plantation Life in the Antebellum South* (New York: Oxford University Press, 1979).

3) 土地投資拡大と自給体制・奴隷管理の推進

1844年にバラードとボイドはパイニー・マウントを事前に視察し、全ての必需品を含めて3万1,000ドルで購入し、さらに、1847年にはエルクを購入した。エルクの奴隷の大半は以前から管理していたブラッシー・バユーから送られた。ブラッシー・バユーの奴隷の一部はエルクに、さらに一部は売却したプロビデンスの購入者のプランテーションに送られた。奴隷労働を分割した際、家族ごと別のプランテーションに移動した奴隷もいれば、別のプランテーションに家族を残したまま離された奴隷もいた。⁽⁴¹⁾

1850年にボイドはミシシッピで1,450エーカーの土地をエーカー当たり9ドルの価格で購入している。1850年代半ばにはテキサス州でバラードが一時所有していた土地を売却し、ほぼ同時にルイジアナ州マディソン教区にあるダンロップを建設し、大量の奴隷をその地に送り込んでいる。⁽⁴²⁾ 1850年代後半には2人の共同所有プランテーションは少なく見積もっても10、多く見積もると16あったと推測されるが、採算の悪い土地は売り、新たに生産力の高い土地を買い続けていった。

1848年のマグノリアの奴隷のリストは表2で確認できる。マグノリアの奴隷については、年度によっては結婚、出生、死亡の記録が残され、結婚・家族形成は行なわれていた形跡がある。マグノリアの奴隷小屋総数は32軒あり、1848年の記録からはそのうち少なくとも24軒の小屋が使用され、その大半は家族単位で使用されていた(表5)。奴隷の家族形成は見られたが、そこで奴隷が自由な生産活動を行っていた形跡は明確ではない。⁽⁴³⁾ 実際、表4に見るように、奴隷の家族が別のプランテーションに離されたこともあった。バラードは奴隷商人時代の人脈を生かして次々に奴隷を購入したが、所有する奴隷を売却することもあり、その冷淡さは家族構成や家族の維持を考慮したものではなかった。現場を巡回するボイドも、特定の奴隷に対し極端に暴力的であることや、関係を持った女性奴隷と、産ませた子供2人をテキサスに売却するという非情な行為まで行なうことも

(41) ボイドの投資熱は50年代以降過熱し続け、1855年には知人に勧められたワシントン郡のカーペンター・プレイスを、また同時期に堤防完成により安全となったポイント・ルック・アウトをエーカー当たり25ドルで、プランター銀行からの支援を得て購入することを提案した。後者は35人の奴隷を3万5,000ドル、1,200エーカーの土地と様々な必需品を含めて8万ドルであった。さらに1,000エーカー近いマテルダ・プレイスの宣伝(ワシントン郡)や1856年2月に競売にかけられたアダムズ郡のメアリーも1,500エーカーで109人の奴隷がついており、購入を試みた。1855年12月25日, folder 237, 1855年1月3日, folder 224, 1850年11月29日, folder 159, Letters, Ballard Papers.

(42) テキサスの土地はミシシッピ州アダムズ郡のプランターが奴隷以外のすべてを2万5,000ドルで購入している。1854年1月5日, folder 205, Letters, Ballard Papers.

(43) 奴隷が与えられた農地で自由に作物生産する活動は、当時、バターナリズムを唱える温情的プランターの政策の一つであり、奴隷に家族単位で農地を与え、自由に作物を生産させ、場合によっては市場に出して売り上げを受け取ることも許可した。作物をプランターが買い上げることもあった。奴隷のこうした自由な生産活動については特に以下参照。Ira Berlin and Philip D. Morgan, *The Slave's Economy: Independent Production by Slaves in the Americas* (London: Frank Cass & Co., 1991).

表4 エルク・プランテーションの奴隷 (1847年)

奴隷家族, 名 (年齢)	家族構成人数
George Mills (40), Louisa (30), Milley (3), Mills(1)	4
William (27), Paulina (33)	2
Big Abe (30), Rose (40)	2
Little Abe (28), Ellen (21), Lewis (5), Ben (3), Tom (1)	5
Robert (28), Jane (25), Frank (3), Nancy (1)	4
Old Jefry(53), Big Maria(45), Little Jefry (18), Monroe (7) Anderson (6), Aggy(3), George Ann (3カ月)	7
Stephen (28), Little Maria (25)	2
Edmund (21)	1
ブラッシー・バユーから来た奴隷	
Isaac (24), Black Henry(21)	2
Ann (48), Rachel (24), Margaret and her child (20), Miles (18) Yellow Henry (16)	6
Cole (35), Marinda (48), Dick (16)	3
Big Henry (30)*	1
Little Charlotte (24)*, Adam (4), Mary (3), Easter (3カ月)	4
Big Charlotte (37)	1
Nelley(40)*, Little Eliza (17)	2
Caney (22), Big Eliza (32), Lucile (11), John (6), Andy (4), Caesar (2)	6
Sarah(33)*, Martha (8), General (6), Spencer (3), Caroline (1)	5
Black Harriet (30), Adeline (5)	2
Betsy (32), Moses (8), Emily (7), Bob(3)	4
Big Kitty (30)	1
Jeny (25), Mahaley (30)	2
Old Philis (50)	1

注) 次の奴隷は隣接するリロード氏所有のプランテーションに送られた。Charles (Little Charlotteの夫), Minor, Diana, Kitty, Joe, Luker (Nelleyの夫), John, Easter, Anthony (Sarahの夫), Isaac, Alfred, Winder (この3人はF. Charlesの最初の妻との子供), Jim, George, Hannah (Big Henryの妻子)

*印は他のプランテーションに家族がいる奴隷。

出典) 1847年1月3日, folder 108, Letters, Ballard Papers.

あった。そうしたことを考慮すると、奴隷は奴隷小屋において家族単位で暮らしていても、監督者や経営者からの自身の労働に対する低い評価を理由にした体罰、ならびに監督者の勝手な都合による体罰や売却の恐怖から逃れることができなかった⁽⁴⁴⁾。

一方、経営者側は奴隷が、求められる基準の労働を遂行するためには、奴隷小屋での生活を快適にする必要があると考えた。労働条件や生活の改善、奴隷小屋周辺の整備などは定期的に改善され、1845年の冬にはバラードはマグノリアの監督者スタンプリー (A. Stampley) と協議し、149人の奴隷が住む全ての奴隷小屋を改築することを提案した。各小屋は16フィート対18フィートで、入口

表5 マグノリアで見られた奴隷の家族 (1848年)

結婚している夫婦 (年齢)	子供 (年齢)
Ambrose (26), Dinah (33)	Samuel (4カ月), Ceily(9), Dealy (9), Mariah (3)
Nat (26), Sarah (25)	Tisha (2), Sie Briscoe (1)
Tom Perkins (28), Charlotte Buckner (28)	
Ed (23), Caroline Edmond (24)	
Robert (24), Lucinda (24)	Louisa (2)
Windsor (23), Nancy Dorson (21)	
John Chase (不明), Sally (27)	Harris (4), Clarisa (1)
Dick (35), Viny (27)	Martha Jane (1)
Merit (32), Francis (23)	Slena (8), Mary Jane (2), Elick (4)
Sie Briscoe (22), Harriet Johnston (27)	
Dolphin (27), Malviny (21)	
Henderson (22), Hester (34)	
Cordy (26), Mary Ben (35)	Jackarias (1)
David (23), Caroline C. (20)	Elizabeth (3)
Jim Clemmon (34), Amy (37)	
Isaac Carter (35), Betsy (36)	
Jim Juniver (21), Tabby (20)	
Solomon S. (25), Nancy Lee (27)	
George S. (22), Matilda (27)	Mary Jane (4), Henry (2)
Epps (25), Mary Ross (23)	Nancy (4)
Tom Creek (不明)	Jim (19), Josepha (4), Peter (2)
Milly (39)	Rebecca (5), Citty (3)
Harriet B. (28)	John (6), Charlotte (4), Nicholas (2)
Rose (30)	Tom (2)

出典) Vol. 23, folder 442; Vol. 39, folder 465, Magnolia Plantation Journal, 1848, Ballard Papers.

に5フィートから6フィート幅のベランダがあり、一つのドア、一つの窓がある設計で、煙突以外は契約者が準備し、「最近到着した貨物」から材料を調達し、「中央に監督者の家を建て、監督者が通行人を識別できるように」した。また「すべての小屋に高い塀を作り、それらをつなげて囲まれ

- (44) 1844年11月ではパイン・マウントの奴隷を売却することについて銀行と手紙のやりとりがあり、またプランターの多くが「奴隷を売ることが最も確実に金儲けできる」方法であることを書簡で述べるなど、売却は頻繁に行なわれていたことがうかがえる。1844年11月28日, folder 79; 1845年2月5日, folder 83, Letters, Ballard Papers. 他にも1848年11月14日, 1850年6月14日には土地を買うために奴隷売却を進めている商人からの書簡が確認できる。1848年11月14日, folder 134, 1850年6月14日, folder 154, Letters, Ballard Papers. 1854年にはアウトポストのジムという奴隷と、エルクの高齢の女性1人を売却している。1854年1月14日, folder 205, Letters, Ballard Papers. ボイドと、マグノリアの女性奴隷バージニアの売却については特に以下の書簡に詳細に書かれている。1853年2月27日, 3月12日, 19日, 4月2日, 19日, 5月6日, folders 187~191, Letters, Ballard Papers. 特に5月6日はヒューストン奴隷市場にいたバージニア本人からの書簡で、ボイドへの憎しみと売却されることへの怒りが書かれている。

表6 マグノリアの奴隷の衣服 (1849年)

日付	衣服の種類	裁縫婦 (労働日)
2月11日～23日	シャツ	Charlotte
2月24日～3月10日	男性用ズボン	Charlotte
3月10日～20日	女性用シャツ	Charlotte (10～19日), Harriet M. (19日), Tabby (20日)
3月20日～24日	女性用上着	Charlotte (20～24日), Harriet M. (20～24日), Tabby (20～24日)
3月23日～29日	男性用シャツ	Charlotte (23～29日), Harriet (23～29日), Tabby (23～29日)
3月28日～4月2日	男性用ズボン	Charlotte (28～2日), Harriet (28～2日), Tabby (28～2日)
4月2日～5日	女性用シャツ	Charlotte (2～5日), Harriet (3～5日), Tabby (3～5日)
4月6日～14日	女性用上着	Charlotte (6～14日), Harriet (6日), Tabby (6日), Julia (6日, 10～13日) (注)
4月16日～19日	少年用ズボン	Charlotte (16～19日), Julia (16～18日)
4月19日～21日	購入されマグノリアに送られた男性用シャツ	Charlotte (19～21日), Julia (19～21日)
4月26日	子供用シャツ	Charlotte, Julia
7月29日～8月14日	冬服	Francis (30～14日), Imanda (6～14日)
8月14日～18日	ズボン	Francis (14～18日), Imanda (15～18日)
8月20日～29日	男性用コート	Francis (20～29日), Imanda (20～29日), Tabby (27～29日), Harriet (29日)
8月30日～9月6日	男性用シャツと子供服	Tabby (30～1日), Francis (30～6日), Amanda (30～6日), Harriet (30日)
9月7日～12日	男性用シャツ	Francis (7～12日), Amanda (7～12日)
9月12日～17日	女性用シャツ	Amanda (12～17日)
9月17日～10月4日	子供服	Amanda (17～4日), Mary Ross (19日)

注) 裁縫婦の年齢: シャーロット・バックナー (26歳), タビー (17歳), フランシス (23歳)。ハリエット・M という名の奴隷は2人おり, それぞれ22歳と18歳。アマンダという名の奴隷は3人おり, それぞれ31歳, 22歳, 20歳。そのうちのどの奴隷が裁縫婦であったかは不明。メアリー・ロス, イマンダ, ジュリアについては年齢不明。なお, ジュリアはカーナックの奴隷で, この作業のためにマグノリアに借り出されている。出典) Vol. 22, folder 441, Clothes Book, 1849, Ballard Papers.

た一角を作り, 夜は一つの扉だけが戸締りされればよい状態にする」ことが明記され, 奴隷に快適な住まいを建設する一方で, その構造は奴隷地区における監督者の監視を徹底するものであった。⁽⁴⁵⁾

奴隷に与えられた衣服は1830年代までは北東部やイギリスで生産され, その購入は高額な出費になった。1830年代後半の不況後, プランテーション内の自給傾向は一層高まり, 機材を購入し, 女性奴隷の裁縫婦がドレス, ズボン, シャツ, 布類を生産するようになった。表6はマグノリアで

(45) 1845年11月12日, folder 93, Letters, Ballard Papers. 奴隷小屋については Breeden ed., *Advice*, 132, South Carolina Planter, *Farmer and Planter*, 8 (Feb. 1857), 25-31.

1849年に生産され配布された奴隷の衣服について、特定の衣服の生産に要した日数、生産した裁縫婦の名前が記している。同時代の農業雑誌等では、衣服生産は良い経営の表れとして奨励されていたが、金属類や機械、ロープや袋などはプランテーションでの自給は難しく、外部からの購入に頼らざるを得なかった。バッグとロープについてはファクターが準備し、製造品や衣服でも厚手の冬服やブーツなど特殊加工が必要なものについては、ファクターを通して注文された。⁽⁴⁶⁾

奴隷の食料は豚肉とトウモロコシが主食であったが、この自給も試みられた。一般には綿花とトウモロコシの耕作地の割合は2対1であったが、トウモロコシの生産高はときとして綿花の3分の2までのぼった。トウモロコシや小麦類は製粉作業が必要であるが、バラードは近隣のピックスバーグの製粉所に持ち込み、そこで1時間8ブッシェルの回転で製粉した。豚肉に関しては家畜生産も行なっていたが、購入に頼る割合が多く、ファクターを通してバラードのケンタッキーの自宅近くから購入していた。⁽⁴⁷⁾ 奴隷が十分に食料を与えられていたかどうかについては様々な議論がある。綿花プランテーションにおける奴隷は平均して1年に281日間、2,800時間ほど労働したと言われ、多くは日曜日の労働を免除されていた。この数字は、同時期の北部の工場労働者が年間平均3,200時間であったのと比較すると大幅に低い。奴隷の食料について、経済史家は1830年から1860年の間に南部の奴隷は1日平均して2,500から3,000カロリー摂取したと推測し、同時代のヨーロッパ諸国の平均的な食生活より多様性に富んだ食料を摂取していたとしている。バラードのプランテーションでは記録が断片的であるが、1852年8月のローレル・ヒルの記録では「牛乳、肉、糖蜜」が与えられ、1週間後には「ベーコン、糖蜜」などと残っている。このプランテーションでは毎週日曜日に1週間分の食料が与えられ、他のプランテーションでも似た形式を取っていた。糖蜜やラム酒は、摘取りなどの課業の褒美として与えられることも多かった。⁽⁴⁸⁾ アウトポストの監督者トンプソンは綿花の収穫が良かったときに、奴隷に夕食に加えてウイスキーを与えたことを記録している。

(46) Moore, *Emergence*, 25; Metzger, "Rational," 131. 裁縫婦は妊娠中の女性や小さな子供がいる女性が多かったという記述もあるが、女性なら誰でも与えられうる仕事であった。フォーゲルによると40歳以上の女性奴隷の1割ほどが衣服生産に関わった。Fogel, *Without Consent or Contract*, 47. 奴隷の衣服については、年間上下それぞれ4枚、靴は年間2足供給される例がよく見られた。Breedened., *Advice*, 183-6, Tennessee Planter, *Southern Agriculturalist*, 1 (Sept. 1853), 267-71 など参照。バラードのプランテーションではマグノリアでの衣服製造の記録は一部残っているが、他のプランテーションではエルクで一部製造していたことを示すことが書簡にあるだけで、マグノリアを中心にいくつかのプランテーションで、全プランテーションの奴隷の分を製造していたと考えられる。

(47) Charles S. Sydnor, *Slavery in Mississippi* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, reprint, 1966), 14; Moore, *Emergence*, 90, 121; 1845年11月12日, folder 93, Letters, Ballard Papers.

(48) 奴隷の食料や栄養状況については Fogel, *Without Consent or Contract*, 132-8; Richard H. Steckel, "Work, Disease, and Diet in the Health and Mortality of American Slaves," in *Without Consent or Contract* Vol.2, Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, eds. (New York: W.W. Norton, 1992), 489-507 参照。

また、1854年の綿花も豊作だったため、ニューオーリンズのファクターから一部のプランテーションに向けて、クリスマス用のウイスキーを多く送ったことが記されている。⁽⁴⁹⁾バラードのプランテーションでは奴隷が独立した生産活動を行っていた形跡がないことから、こうした稀に与えられる報酬・褒美は奴隷の労働意欲を引き出す効果が少なからずあったと考えられよう。

マグノリアでは逃亡する奴隷もいた。1844年にジェイムズ・ボイドは、ジェファソン郡の逃亡奴隷のうち4人はマグノリアからの奴隷であることを知り、数週間後、監督者が同郡の刑務所があるポート・ギブソンに行き奴隷を連れ戻している。別の監督者もまた、マグノリアのある奴隷を連れ戻すために刑務所に行ったが、その後同じ奴隷は再度逃亡している。1846年夏には逃亡奴隷が近隣のプランテーションの監督者に捕えられる事件があり、その奴隷はラバの扱いに失敗し、鞭打ちされるのを恐れての逃亡であった。1849年の夏にはマグノリアから5人の奴隷が逃亡したが、全員ルイジアナ州で捕えられた。数年後、ボイドはマグノリアの奴隷3人が逃げた際に、「こうした逃亡奴隷を助けるビジネスが数年来あるようで、一つの隠れ場所がクレイボーン郡にある」と報告しており、近隣に逃亡奴隷の隠れ場所であったマルーン、あるいは脱走を手助けするネットワークがあったと考えられる。⁽⁵⁰⁾先に見たように、監督者は奴隷に対し場合によって体罰を与える一方、最大の労働を引き出す労働環境を作る必要があり、奴隷が逃亡したり、反乱をおこさないようにときに報酬・褒美を与えたり、奴隷小屋配置の工夫など管理体制を強化していた。逃亡に成功する例は少なく、連れ戻されると扱いにくい奴隷ということで売却の対象になるため、奴隷にとってはリスクの大きい反抗手段であった。監督者からの暴力を苦に逃亡する奴隷が出ると、その監督者は解雇される可能性も高かった。南部中で多く見られた奴隷の逃亡は、他のプランテーションにいる家族に会いに行く目的や、出身地に戻ろうとしての逃亡も多く、労働の過酷さや体罰から逃れるためだけが要因の全てではなかった。しかし、逃亡奴隷が出るプランテーションは監督不行き届きであり、労働環境のさらなる改良が必要であると考えられ、監督者に問題があると判断された場合はその交代という処置がとられることが多かった。

フォーゲルとエンゲルマンは綿花プランテーションにおける労働時間配分は綿花に34%、トウモロコシに17%、家畜飼育に15%、その他奴隷維持のための衣服生産や料理や育児に34%、と算出した。これらの分類はさらに細分化でき、綿花プランテーションでは1860年時点で平均して毎日

(49) 1849年5月5日, folder 140, 1854年12月28日, folder 221, Letters, Ballard Papers. 他にも、奴隷の労働時間が予定より長引いたため、監督者が奴隷に土曜の夜に豪華な食事を褒美として与えた例などがある。1844年7月5日, folder 75, Letters, Ballard Papers.

(50) 1844年8月24日, folder 76; 1844年9月4日, folder 76; 1845年7月10日, folder 89; 1846年6月26日, folder 104; 1849年7月31日, folder 141; 1852年5月24日, folder 177, Letters, Ballard Papers. 逃亡奴隷が逃げたマルーン(逃亡奴隷を中心としたコミュニティ)は米南部より西インド諸島で多く見られた。Natalie Dessens, *Myths of a Plantation Society: Slavery in the American South and the West Indies* (Gainesville: University Press of Florida, 2002), 95.

22種類の異なる作業が組み合わさって行なわれていたと言われている。奴隷数が増え、綿花生産額も上昇するに従い、より複雑化する組織を管理し、作業を円滑に進めていくため、経営者・監督者にもより優れた経営能力・対応力が要求されたと言えよう。⁽⁵¹⁾

4) 綿花品種、摘取りとプランテーション間分業体制

綿花生産は収穫の時期にあたる秋から冬にかけて最も多くの労働力を必要とし、プランテーション内の全奴隷を動員して出荷する準備が進められる。主食のトウモロコシは綿花の繁忙期と重ならないように、夏に耕作が進み、綿花摘取り開始直前に最初の収穫が始まるのが一般的であった。⁽⁵²⁾最も肥沃な土地では綿花が最も背の高い摘取り手よりもさらに高くなることもあり、一つの苗から何百もの綿花のさやが収穫できた。摘取り作業は、7月末から8月にかけて開始し、クリスマス期まで休みなく継続する。奴隷は籠と袋を渡され、巨大な籠は奴隷が作業する綿花の列の端に置き、列を歩いて摘んだ綿花を袋に入れ、列が終われば籠に入れる、という作業を繰り返した。奴隷1人の摘取れる量には個人差があった。ある算出では、19世紀半ばには各奴隷は1日平均で250から300ポンドの綿花を摘取ったとしている。それだけの綿花の摘取りが可能になったのはプチ・ガルフの種類の綿花が発見され広まった1820年代以降のことであった。⁽⁵³⁾19世紀初めまでは、1日1人当たり50から60ポンドの綿花の摘取りしか可能ではなかった。南部で最初に定着した綿花の品種は18世紀初頭から栽培されていたグリーン・シード種とシー・アイランド種であったが、その後18世紀半ば以降はブラック・シード種（クリオール種）が加わり、それぞれ適した地質があり、栽培される地域も異なった。19世紀初頭にメキシコから新しい品種が南部に持ち込まれたことで、南部の綿花は大きな転換期を迎えることになる。

綿花の品種改良については同時代資料から多くの事実がわかってきており、1820年代以降の様々な実験の結果、新しい品種が採用され始め、この新しい種子が生産増加の大きな要因であったと言われている。これらはメキシコから入ってきた品種と、それまで既に南部綿花地帯で主流となっていたグリーン・シード種とクリオール種、シー・アイランド種などをかけ合わせたものであり、とりわけミシシッピ州デルタ地帯で採用されたプチ・ガルフ種とワン・ハンドレッド・シード種の2種類が生

(51) Fogel and Engerman, *Time on the Cross*, 41.

(52) 綿花栽培は伝統的に組労働を用いたが、組労働採用には一定数の労働力が必要なことから、組労働プランテーションの平均資産は5万6,000ドルと言われ、北部の平均的農家や南部のヨーマン層の平均の15倍にもなった。Fogel, *Without Consent or Contract*, 52, 83; J. T. Towman, "Gang System and Comparative Advantage," *Explorations in Economic History*, 42, Vol. 2 (April 2005); Moore, *Emergence*, 78 参照。組労働中心であった綿花プランテーションの奴隷労働が1840年代以降、徐々に課業労働を採用し始めたのは耕作機や二重シャベルの登場など、農具の改良の影響も大きい。トウモロコシ栽培時期については Metzger, "Rational," 130-31 参照。

(53) Moore, *Emergence*, 12-3, 85. 奴隷の摘取り術も重要なスキルとしてみなされ、奴隷の価値に反映された。Sydnor, *Slavery in Mississippi*, 15.

表 7 南部同時代文献に見る 1 日当たりの綿花平均摘取り量

年代	平均摘取り量 (ポンド)	
1800 年	50 (注 1)	注 1) Wailes, “Early Nineteenth Century” (1854).
1810 年	69 (注 2)	注 2) <i>Southern Cultivator</i> (1861).
1825 年	100–125 (注 3)	注 3) <i>Niles Register</i> , 29 (Dec. 24, 1825), 259.
1841 年	107 (注 4)	注 4) <i>Hand and Machine Labor</i> , Vol.II (1899), 443.
1850 年代 (注 5)	100 +	注 5) 1850 年代については、3 種類の記録が残っている。 100 + ポンドは <i>Southern Cultivator</i> (1861), 200 ポンドは Solomon Northrup, <i>Twelve Years A Slave</i> (reprint, 1853, Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1968), 125 および <i>Louisiana Historical Quarterly</i> , 33 (Oct. 1850) より。
	200	
	200	
1854 年	200 (注 6)	注 6) Wailes (1854).

出典) Stanley Lebergott, *The Americans: An Economic Record*, 168, 176.

産を飛躍的に向上させた。メキシコ種の利点は、それまでの種に比べて効率的な摘取りが容易な形状をしていたため、同じ時間内で収穫できる綿花の量を大幅に増加させたことと、1 苗でより多くの綿花が収穫可能であったためエーカー当たりの生産高を大幅に上昇させたことであった。しかも新品種の綿花は良質で海外市場でも好評であった。⁽⁵⁴⁾ スタンリー・リーバーゴット (Stanley Lebergott) の同時代文献の分析によれば、1800 年頃は南部綿花生産に従事する奴隷 1 人の 1 日平均収穫量は 50 ポンドであったのが、1860 年には 1 日平均 200 ポンドまで上昇している (表 7)。これは当時の商業雑誌等に残る断片的な記録を集めたものであるため、地域・地質の差や綿花品種の変更のタイミングなどは言及されていないが、摘取り量が年代とともに増加傾向を示したことがわかる。この間に、綿花の主要生産地帯は東部海岸沿いから西部ブラック・ベルトへと移動し、そこで栽培される品種もシー・アイランド種、グリーン・シード種、クリオール種などを経て、生産性の高いメキシコ種のものへと移行していったため、南部全体で見ると、1 人 1 日当たり 4 倍の収穫量の実現が可能となった。南部で広く購読されたデボウ編集による商業雑誌デボウズ・レビュー (*Debow's Review*) には、1852 年までに奴隷は 35 年前に 1 週間かかった収穫量を 1 日で実現したと記されている。こうした同時代文献の分析や、南部の大綿花プランテーションの大量の摘取り記録からポール・W・ローディ (Paul W. Rhode) らは南北戦争前の 50 年間に奴隷 1 人が 1 日に摘取れる綿花の量は 2~⁽⁵⁵⁾ 2.5 倍に増えたと主張している。

(54) 綿花の種子は南米、アジアや中東からのサンプルも試された。当時の種類、品種改良について Alan L. Olmstead and Paul W. Rhode, ““Wait a Cotton Pickin’ Minute!”: A New View of Slave Productivity” (Paper presented at the Alfred D. Chandler Lecture at the University of North Carolina at Chapel Hill, August, 2005) 参照。プチ・ガルフ種とワン・ハンドレッド・シード種以外にも、1840 年代以降、シュガー・ローフ種、バナナ種、マストドン種、ボイズ・プロリフィック種などがミシシッピのデルタ地帯で普及した。

19世紀半ばの綿花生産の中心地であるデルタ地帯では、奴隷1人が1日に平均300から350ポンドの綿花を摘取れば非常に良い収穫とされたが、中には500ポンド以上収穫する奴隷もいた。あるプランテーションでは、最も摘取りを得意とした背の高い女性が二つの列の間を通り、両手を使って同時に摘取っていた記録がある。このプランテーションでは摘取り作業中の奴隷に対し、他の奴隷が水などを運び、作業を止めないように補助していた。組労働の採用が中心であった綿花栽培であるが、収穫に関しては早くから課業として、一定の領域や一定の重さの綿花の摘取りを1日単位で奴隷に与える傾向が見られた。それを超える摘取りも推奨され、その場合は報酬や商品などを与えることでより多くの収穫を促した。大プランテーションにおいて、奴隷同士で収穫量を競わせ、報酬を与えるなどの手段と並行して毎日行なわれたのが、その日の各奴隷の収穫の計量であった。ある旅行者の記録では、その日のノルマに満たない収穫の奴隷は計量後に監督者に呼びだされ、順番に鞭打ちされたという。雑な摘取りも体罰の対象となり、全体として収穫量が少ない場合は摘取りに従事した奴隷全員が鞭打たれる事例も見られた。⁽⁵⁶⁾

天候が良ければ摘取られた綿花はすぐに梱包に運ばれることもあったが、ほとんどの場合は乾燥させるために特設の平面に広げられ、そこで質の悪い綿花は取り除かれた。摘取り作業で夜間行なわれるのは、この乾燥綿花を選別する作業のみであった。梱包の部屋は綿繰機のある小屋（ジン・ハウス）と併設し、綿繰機がある上のロフト部分に設置されていることが多かった。綿繰機に関しては、大規模プランテーションでは80刃の綿繰機が見られたが、大多数は60刃の機械をいくつかの綿繰小屋にそれぞれ馬力で起動させるか、一つの大きな綿繰小屋で蒸気を利用するかのいずれかであった。定期的に綿繰機の点検・改良を専門業者に依頼することも監督者の役割であった。中には、監督者自身が機械工としての経験があり、綿繰機を始め、農場にある各種機械や道具を点検・改良することが可能であることを採用時に自ら売り込む例も見られた。綿花においては、綿繰の済んだ綿花をプレスし固定する作業が最終工程になり、一つの強力なスクリューでプレスされ、ロープで縛って梱包し、港へと送り出した。プレス機も綿繰機のある小屋と併設している場合が多かった。バラードのプランテーションでは、ある程度まとまった量の綿花が摘取られた後、乾燥、綿繰、プレスなどの作業が開始された。1848年のマグノリアでは、摘取りは8月14日に開始した。綿繰とプレスは9月4日から行なわれ、綿繰機に3人、プレスに6人の奴隷が作業にあたった。ローレル・ヒルでは早く綿繰作業を開始した年もあったが、例年は11月から綿繰をした。摘取り期間中も奴隷は食料用の作物生産を同時に行ない、激しい雨などの摘取りに不向きの日に集中してジャガイ

(55) Olmstead and Rhode, "Wait a Cotton Pickin' Minute!," 2; Stanley Lebergott, *The Americans: An Economic Record* (New York: W.W. Norton, 1984), 168, 176.

(56) Moore, *Emergence*, 9; Fogel, *Without Consent or Contract*, 45; Fogel and Engerman, *Time on the Cross*, 206; Olmstead and Rhode, "Wait a Cotton Pickin' Minute!," 27. 摘取り作業自体は重労働ではなく、女性の方が適していたと言われ、女性の方が6対4の割合で多く従事した。Metzer, "Rational," 135-6.

モや豆類、トウモロコシの耕作にあっていた。南部の主要港にそのシーズン最初の綿花が到着するのは10月であることが多く、その後通常6カ月以上にわたって綿花が到着し続けた。⁽⁵⁷⁾

マグノリア監督者コックスが1846年の摘取り期間の労働日算出を記している。それによると、「今年度は58日間摘取りをし、わずか22万4,707ポンドの収穫しかなかった。日数には雨の日も含まれる。37日と半日は綿繰を行ない、2つの機械で1日平均4ペイル75ポンド綿繰し、11月9日の正午に綿繰を終了した。計30日は奴隷の病気により摘取りができず、45日は奴隷の服を作るための作業で摘取りができなかった。雨のため全く摘取り作業ができなかったのは1日だけであったが、雨が降った日は多かった。摘取れなかった日は1人の奴隷がその1日、働けなかったことであり、その合計は76日間であった。綿繰は37日間、3人で行なっていたので、113日分のロスであることから合計すると189日となり、3カ月と23日間に相当する。また、5人の奴隷で6日間、綿花のプレスを行なった」と記されている。⁽⁵⁸⁾この労働日に従って摘取り記録を算出したのが以下の表8、9、10になる。

綿花の収穫にあてる日数は年度により異なり、天候によって大きく左右され、投入する奴隷労働も作物の状況によってその都度、対応させる必要があった。マグノリアでは正確な摘取り記録が得られない年度を除けば、1840年代半ばから50年代半ばにかけて、年間の綿花生産高については極端に不作の年はなかったことがわかる。また奴隷1人当たりの摘取り量については、同時代文献などから確認された表7のデータに合致し、100～200ポンドの間で推移している。マグノリアでは摘取り可能な奴隷数が減少していくが、天候に恵まれ豊作な年度であれば9月から11月まで集中して労働日数を増やすことで生産高をある程度維持することが可能であった。ただし、10月、11月になると綿繰やプレス労働に回る奴隷が常時5～10人は摘取り作業から外れ、女性奴隷は定期的に数人が終日裁縫作業に回っていた。さらに農作物生産で常時数人は摘取りから外れていた。マグノリアでの奴隷数の減少は、新しく建設された近隣の別のプランテーションに奴隷を送り込んでいること、特に収穫期には一定人数を長期的に貸し出していたことがわかっており、それらが要因となった。マグノリア以外のプランテーションの収穫の記録は断片的にしか残っていないため、各プランテーション別の詳細な比較は資料的に困難であるが、記録の残る1857年のエルコの総収穫高は奴隷

(57) 1848年9月8日, folder 133, 1848年11月12日, folder 134, Letters, Ballard Papers. 綿繰技術は1850年代に大幅に改良され、種と繊維の分離にそれまでの金属に代わってワイヤーを使うようになった。綿繰機自体は2-3シーズンしか持たないが、馬力が一度に2機しか回せないのに対し、蒸気を使用した綿繰機は一度に多くの機械を回すことができたので大規模農家では好まれた。1842年にはプロビデンスで新しいプレス機が導入されたことが報告されている。1842年6月28日, folder 51, Letters, Ballard Papers; Moore, *Emergence*, 58-64, 69-71; Volumes, Series 5, Magnolia (1848) and Laurel Hill (1848), Ballard Papers.

(58) Folder 469, Cotton Book 1846, Vol. 41 (42), by J. H. Cox at Magnolia 1846, Ballard Papers (additions). 労働日は奴隷1人が1日働いて1日と計算。

表8 マグノリア・プランテーションの綿花摘取り記録 (1845-1856年)

年	労働日数合計	収穫綿花総額 (lbs)	摘取り可能な労働者数			総労働日	労働者1人当たりの平均摘取り量 (lbs)	1日平均摘取り量 (lbs)
			男性	女性	合計			
1845年	47	497,981	54	46	100	3,510	142	10,595
1848年	55	441,998	34	33	67	3,317	134	8,036
1849年	不明	85,185	18	31	49	不明	不明	不明
1850年	64	268,883	15	17	32	不明	不明	4,201
1851年	48	291,871	17	17	34	1,374	212	6,081
1853年	69	402,798	21	16	37	2,068	195	5,838
1854年	81	401,152	27	20	47	2,937	137	4,953
1855年	108	495,294	22	16	38	3,158	157	4,586
1856年	90	366,153	24	19	43	3,046	120	4,068

注) 摘取り可能な労働者数はその年度の平均数。

1845年: 8月の記録の一部が欠落。

1848年: 男性奴隷は53日間労働した。

1849年: 9月以前の記録がなく、その後も記録の大部分が欠落しているため正確な算出ができない。

1850年: 奴隷1人当たりの摘取り額の記録が欠落している箇所が多い。1日の摘取りの合計のみ記録されている。

1854年: 10月後半から多くの奴隷がカーナックとエルコに摘取りの補助のため送られる。

1855年: 多くの奴隷が11月18日~12月7日の間、エルコに摘取り補助のため送られる。

出典) Series 5, Magnolia Plantation Volumes, Ballard Papers.

表9 プランテーションの摘取り記録

プランテーション名 (年)	総労働日数	綿花生産総額 (lbs)	全労働者数 (男性/女性)	総労働日	労働者1人当たり平均摘取り量 (lbs)	1日平均摘取り量 (lbs)
ローレル・ヒル (1852年)	87	377,033	41 (20/21)	2,483	152	4,334
エルコ (1857年)	68	901,057	97 (50/47)	5,070	178	13,251

出典) ローレル・ヒルについては, Vol. 26, folder 447, Laurell Hill Plantation Journal, 1852, Ballard Papers, エルコについては, Vol. 32, folder 456, Cotton Plantation Record and Account Book, Elcho Plantation, 1857, Ballard Papers を参照。

数が多かったこともあり、非常に高くなっている。これはエルコが新しいプランテーションで、多くの奴隷を送り込み、かつマグノリアからも多くを貸し出したため、高い収穫高を示した。奴隷1人1人が毎日どれだけの量の綿花を摘取ったかを計量して記録し、多く摘取った奴隷に報酬を与えるなどの手段で生産力向上を目指すことは、当時の綿花プランテーション経営のあり方として奨励されていたことは先に述べた。断片的な資料からも、マグノリアが初期に監督者雇用の問題で苦慮した後、1840年代後半からは比較的評価の高い安定した監督者の雇用が続き、綿花収穫の生産量増加に貢献した形跡が見られる (表8, 1851年, 53年)。

マグノリアの奴隷数は少ないまま推移するが、その多くが一定期間他のプランテーションに借り

表 10 マグノリア, ローレル・ヒル, エルコ各プランテーションにおける月別綿花摘取り記録

	7月		8月		9月		10月		11月		12月	
	日	lbs	日	lbs	日	lbs	日	lbs	日	lbs	日	lbs
1845年(M)	0	0	8	48,426	19	221,165	20	228,390	-	-	-	-
1848年(M)	0	0	6	37,361	26	221,136	20	163,791	3	19,710		
1850年(M)	0	0	4	18,491	22	110,438	24	95,715	14	44,239	0	0
1851年(M)	0	0	17	67,770	-	-	-	-	20	160,997	11	63,104
1852年(LH)	0	0	11	42,001	20	84,729	21	125,919	21	87,450	14	90,368
1853年(M)	0	0	0	0	17	78,080	18	129,997	23	144,785	11	49,936
1854年(M)	0	0	15	89,813	21	128,326	25	127,379	18	50,814	2	4,820
1855年(M)	1	4,615	27	161,642	25	138,200	25	89,427	14	55,784	16	45,626
1856年(M)	0	0	11	57,317	26	167,430	26	153,296	24	126,680	3	12,430
1857年(E)	0	0	0	0	21	251,906	21	301,080	20	297,126	6	50,945

注) Mはマグノリア, LHはローレル・ヒル, Eはエルコを指す。

出典) Series 5, Magnolia Plantation Volumes, Ballard Papers.

出されたり、他のプランテーションで生産された綿花の綿繰やプレスの代行に回された奴隷数が増えたことから、労働者1人当たりの摘取り量は減少していったと言える。新しく開拓したプランテーションに比べてマグノリアでは綿花収穫後の工程に必要な諸設備が整っていることから、他のプランテーションで加工しきれない綿花を綿繰・プレスすることが多々あった。衣服の製造なども、マグノリアに近隣のプランテーションから手伝い用の奴隷が貸し出されていた記録から、マグノリアを中心に、周辺のプランテーションの分も生産していたと考えられる。摘取り作業に関しては、エルコ(マグノリアのある郡から見てルイジアナ側の隣の郡に所在)、カーナック(南側に接する郡に所在)、ローレル・ヒル(同じ郡に所在)への貸し出しは、距離的に近いことから頻繁に確認される。そうした位置づけから、この四つのバラード所有のプランテーションを一つの生産単位として見ると、マグノリアを拠点として様々な農場内活動が分業されていたと見ることができる。特にバラードとボイドの初期購入のプランテーションの操業が安定した以降に新たに獲得した土地には大量の奴隷が送り込まれ、摘取りの時期には他のプランテーションから奴隷を動員してまで収穫を上げようとした。こうした遠隔地経営における土地と労働への追加的投資による生産拡大は、マグノリアに見るように、現地にいる経営者と遠隔地の所有者が緊密な関係を築き、安定した監督者の雇用が実現し、衣服や食料面、加工用機械の準備など自給体制を整えたプランテーションが既に機能し、十分に生産体制が整っていれば、より有用であったと言える。バラードのプランテーションの摘取り記録は、平均的な記録であってデルタ地帯の奴隷としては極端に高い摘取り量を示すものではないが、プランテーションごとの生産高の維持、また高い生産が見込める近隣プランテーションへの奴隷労働の配置への工夫がうかがえる。これは複数のプランテーションにおいて大量の奴隷労働を使う場合の特徴の一つであったと言える。

IV. 結び

本稿で取り上げた事例は、19世紀半ばに複数の州にまたがって多くのプランテーションを経営していた資料に基づいたものであり、その分析では、各プランテーションにおける綿花の効率的生産のための経営上の変化を見出すことができた。1820年代から外来種との混合を中心に進められた綿花の新品種の採用は生産性の向上に大きく貢献した。技術革新の面でも、綿繰機の改良は頻繁に行なわれ、綿繰機以外にも綿プレス機技術の改良により、1袋に300～400梱の綿花をプレスして入れることが可能となった。また、ミシシッピ在住の経営パートナーに見受けられた西部の新しい綿花生産地の開拓への熱意は、当時のプランター経営者には共通に見られた精神であったが、本稿で扱った事例のように遠隔地経営の場合は、経営の拠点となるプランテーションでの生産体制が築かれ、そこから労働や生産工程のサポートを受けて新しい農地を獲得していくことが、効率よく生産を拡大する有益な手段となった。

本稿で焦点を当てたのは個別のプランテーションにおける管理体制・自給体制の実態である。プランターは、各プランテーションにおける監督者の存在を重視し、その指揮を徹底し、奴隷の管理にあたらせた。遠隔地経営において監督者の雇用は監督者という身分の性質や、職務遂行の厳しさなどから、容易ではなかったが、多くの候補者の中からより優れた監督者を採用して信頼関係を築き、中には同じ経営者のプランテーションで複数回にわたって雇用されていた形跡も見られた。優れた監督者の選定は、プランテーション内の規律の徹底を実現し、それは奴隷の労働環境の改善と生産の安定につながった。また、食料や衣服の自給についても、本稿で考察した事例や同時代文献から、それらが奨励されていたことがわかる。さらに綿花の摘取り作業に従事した奴隷は、収穫の繁忙期にプランテーション間を移動して働かされることも行なわれていた。19世紀半ばにおける綿花生産の飛躍的上昇は品種改良や技術確認、さらには本稿で指摘した遠隔地プランテーションでの管理体制の変化・工夫によって生産の効率化を図ることを基盤として実現できた様子が見て取れる。

このような大プランテーションは1860年においても各綿花生産州で数カ所しか存在しなかったが、南部の綿花出荷額への貢献度は割合として高かった。また、プランテーション内の自給や奴隷管理の手法については、中規模以下の綿花生産者に様々な媒体を通して伝わり、影響を与えていたことを考えると、南部綿花生産に直結する決定的な変化であった。綿花生産の増加の要因としてこれまでは土地改良と生産地増加が分析の中心となっていたが、生産力の向上を論じる上で、奴隷管理や品種改良、摘取り技術の側面も重大な変化として一層検討する必要があると言える。

(経済学部専任講師)